



「帰る旅」プロジェクトレポート 2023

仲間を増やし、場を広げる
2年目を迎えた「帰る旅」

2022年1月に一般社団法人雪国観光圏とじやらんりサーチセンター（JRC）の協働によって始まった「帰る旅」プロジェクト。運営事務局である「帰る旅研究会」では、



01)。新規メンバーが中心となって新たなプロジェクトとなる「帰る旅スタディツアー」も実施された(TOPICS 02)。秋には「帰る旅」の認知向上を目的としたトークライブ(TOPICS 03)が行われ、冬には「場」として共有する交流滞在拠点(PL)が複数準備される(TOPICS 04)など、多彩な取り組みが進行中だ。

「帰る旅」プロジェクト2023年の主な取り組み

TOPICS 02 「帰る旅スタディツアー」を新潟県津南町で開催

新たに「帰る旅研究会」に加わったメンバーが関係性クリエイターとなり、津南町での「帰る旅スタディツアー」を企画。9月と10月に実施されたツアーには全国から参加者が集まり、「温泉宿リニューアルのためのアイデアワーク(第1弾)」や「秋山郷・古民家再興の片づけ&アイデアワーク(第2弾)」などを行った。「ワーク終了後には地域の方と参加者が一緒に食事をしたり、周辺を散策したりする時間も。2日間みっちり時間をともにすることで交流が深まり、お互いをあだ名で呼び合うような方も」(北嶋)。ツアー終了後もオンラインコミュニティができるなど、一般的な旅行とは異なる「関係性」が生まれている。



10月の「秋山郷・古民家再興ツアー」には9名の参加者が集まった



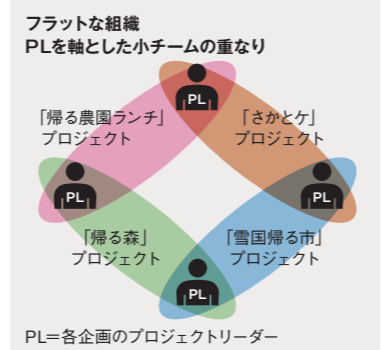
左/「関係性クリエイター」の案内で集落を散策。右/1日目の「片づけワーク」では、家財の片付けや周辺清掃などが約2時間行われた



左/地元の方も参加した夕食は、和気あいあとした雰囲気。右/古民家の活用アイデアなどを検討する「秋山郷・古民家アイデアソン」も実施

TOPICS 01 「帰る旅研究会」メンバーが増えより広域的で多彩な組織に

当初は南魚沼を中心とする9名で構成された「帰る旅研究会」だが、津南や十日町、湯沢のメンバーも加わり、16名の組織に。「2023年1月の『関係性クリエイター育成研修』が大きなきっかけ。新規企画の検討などを行う研修を通じて『帰る旅』への理解が深まり、「自分ごととして関わりたい」と新たなメンバーのジョインにつながりました」(「帰る旅研究会」共同代表・JRC客員研究員の北嶋緒里恵)



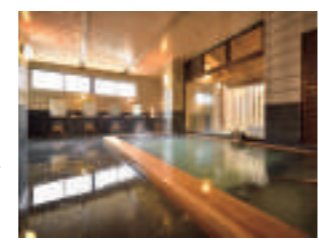
TOPICS 03 「帰る旅」の仲間を増やすトークイベントを都内で開催

「帰る旅」の認知度UPとファン獲得を目的とした「帰る旅Talk Live」を、9月20日に東京・国分寺で開催。「帰る旅研究会」の共同代表・井口智裕さんとクルミドコーヒー店主の影山知明さんが、「これからの旅のあり方」をテーマに意見を交わした当日のダイジェストは、次ページからご紹介する。



TOPICS 04 第2、第3の「さかとケ」を雪国観光圏内で整備中

「帰る旅」を象徴するプロジェクトのひとつ「さかとケ」(南魚沼市)は、ハウスワークを手伝いながらハウステイする「家系な拠点」。その第2弾、第3弾となる交流系滞在拠点が、期間限定で十日町市(3ヶ所)と湯沢町(1ヶ所)にも登場予定だ。

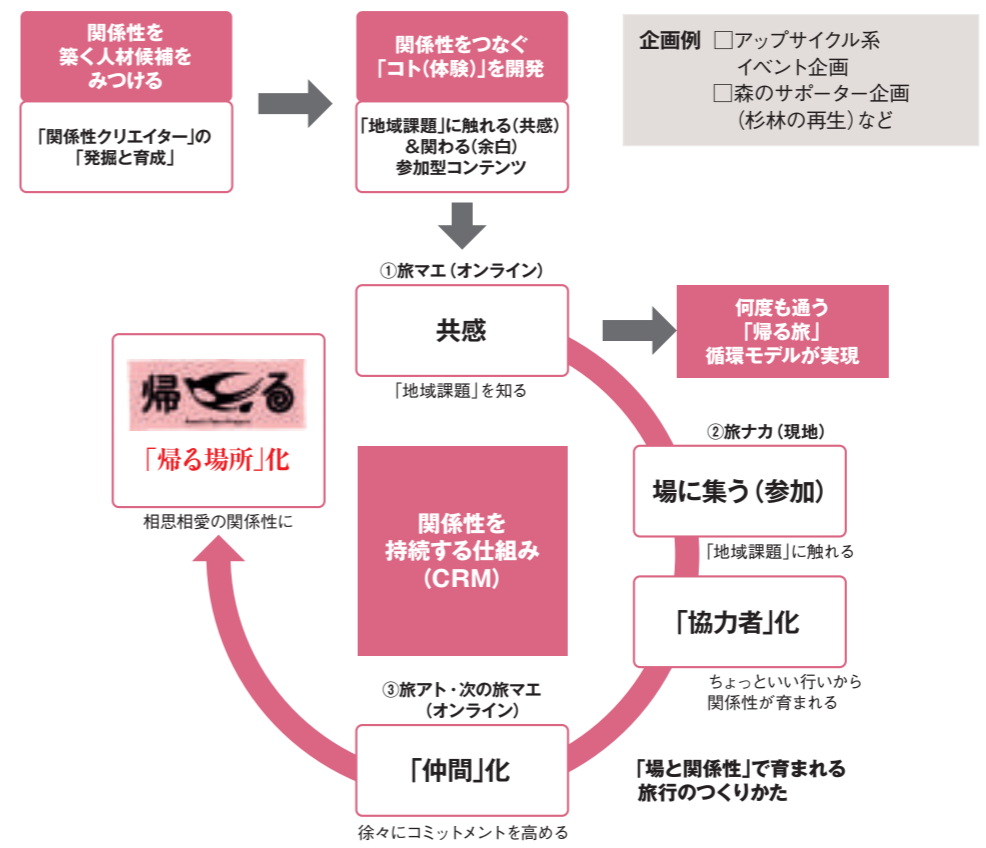


旅人と地域の関係性を拡張せよ！ 帰る旅がもたらす 新たな旅の形とは

「いらっしやいませ」ではなく、「おかえり・ただいま」で始まる旅。そんな合言葉とともに始まった「帰る旅」プロジェクトが2年目を迎えている。地域課題に触れる参加型コンテンツを通じて、旅行者と地域の人々が関係性を育み、何度も通いたくなるような場をつくる。「帰る旅」プロジェクトの現在地をレポートする。

「帰る旅」を「何度も、ある地域へ、ある場所へ通う旅」と定義し、その実現を目指している。図1の通り、「帰る旅」では、旅行者と地域の人々をつなぐ「関係性クリエーター」が中心となってそれぞれのプロジェクトを企画。そこに参加した旅行者と地域の人々が「仲間」になることで、「帰る場所」が育まれていく。そのため、一つひとつのプロジェクトの「持続可能性」が重要なポイントとなる。どんなに魅力的なプロジェクトであっても、一過性のイベントや受け入れ側の負担が大きすぎるものは続かない。そうなる何度も通いたくなる「場」や「関係性」が失われてしまうからだ。

図1 循環を生み出すことで「帰る旅」を実現



「帰る旅」プロジェクトとは
新潟県、群馬県、長野県の3県7市町村を圏域とする「雪国観光圏」とJRCが協働で立ち上げた「帰る旅」。上図の通り、関係性クリエイターが中心となってコト(体験)を企画し、来訪者や地域の人々を巻き込むことで関係性が深化し、第二の故郷のような「帰る場所」が生まれていく。1年目は、「場」として共有するワークインレジデンス「さかとケ」や「帰る森」などのプロジェクトが行われた。詳細は『とーりまかしvol.71』を参照。



「帰る旅」 Talk Live

「行く旅」から「帰る旅」へ これからの旅のあり方

ここからは、カフェ「クルミドコーヒー」の店主としてローカルカルチャーの構築に取り組む影山知明さんと「帰る旅研究会」共同代表の井口智裕さんによるトークライブの様様をダイジェストでご紹介。ふたりが考える「新しい旅のあり方」や「帰る旅」の可能性とは？



井口 私は旅館の4代目で新潟の越後湯沢と南魚沼で2軒の旅館を経営しています。25年ほど旅行業界にいますが、コロナ禍になって、旅の形が大きく変わっているような気がします。昔は、おいしいご飯やお酒を楽しむ贅沢な旅行が好まれたと思いますが、今は「泊まる」ところはほとんどでいいから、その土地ならではの体験をしたいという方が、特に若い人のなかで増えていると感じます。影山さんは旅行についてどのように感じていますか？

影山 実は僕はあまり旅行が好きではなくて基本的に「家でいるのが一番好き」という人間なんです(笑)。だから旅行のトレンドのことはわからないけれど、ここ数年で印象に残った個人的な体験があります。2年ほど前に井口さんが経営する南魚沼の「Ryugon」に泊まらせていただいたのですが、当時はコロナ禍の影響もあって飲食店の経営者として出口が見えないような感覚がありました。それが、全く予定のない3日間を過ごせたことで、ずいぶん精神

旅に求められるものが 変わってきている(井口さん)



帰る旅研究会
共同代表
井口智裕さん

1973年新潟県南魚沼郡湯沢町生まれ。温泉旅館の4代目として家業を継ぐ。2008年には「雪国観光圏」をプランナーとして立ち上げ、その後15年間にわたり地元の事業者とともに地域独自の暮らしや文化を観光資源に変える取り組みを実践する



クルミドコーヒー
店主
影山知明さん

1973年東京都・西国分寺生まれ。「クルミドコーヒー」を拠点に、まちの仲間とともに、クルミド出版、クルミド大学、地域通貨ぶんじ等を事業化。著書に「ゆっくり、いそげ〜カフェからはじめる人を手段化しない経済〜」(大和書房)

的に浮上することができた。仕事や自分の課題とずっと向き合う日々を過ごしていたからこそ、日常の枠からはみ出して「ああ、違う世界に来たなあ」という瞬間が自分にとっての転換点になったんです。そのときに「旅」と「旅行」という言葉の使い分けが、大事だと感じました。僕の勝手な定義だけれど、「旅行」は決まった予定があってそれを消化していくもの。「旅」はもっと気ままで、思いがけない出会いがあるようなもの。振り返れば、人生の節目節目で「旅」をしてきた記憶があるし、そこには色褪せない魅力があると思います。

井口 その定義に沿うと一般的には「旅行」をしている方が多いのかもしれないですね。「旅館に行っておいしいものを食べよう」、「スキーに行ってお温泉に入ろう」と目的が決まっている、それをこなしているというか。私たちは受け入れる側なので、わざわざ来てくださったというお客さまの期待や目的には応えたいと思います。ただ一方で、お客さまはそんな予定



「さかとケ」は、南魚沼市の旅館「ryugon」での5時間のハウスワークの手伝いと自室清掃を行うことで、シングルルームでの宿泊が無償提供される会員制コミュニティだ。旅館の大浴場の利用もできる

調和の「旅行」に飽きているのかもしれないと感じます。その意味で、予定調和の外側にある余白にこそ大きな可能性があると思うし、「新しい旅の文化」とは何かを、今みんなと一緒に考え始めないといけないんじゃないか、と。

影山 タイムパフォーマンスという言葉が流行する時代なので、何が手に入るかわからないものに時間を使うことに対して、ハードルの高さを感ずる人は多いと思います。ただ、

「このために自分は旅に出た」と後から気づくこともある(影山さん)

「このために自分は旅に出た」と後から気づくこともある(影山さん)

新しい旅のあり方を来訪者と一緒に 作っていききたい(井口さん)

そこに身を投じさえすれば何かしらの出会いがあつて、世界が広がっていく。「このために自分は旅に出た」と後から気づくこともあると思います。そもそも人生自体がどこにたどり着くかわからないものだし、偶然的な出会いが結果的に人生を作っていくきっかけになることもある。最初から狭く考えすぎないことが、「旅」を楽しむコツかもしれません。

井口さんは、宿のお手伝いを5時間した方に宿泊場所を無償で提供する「さかとケ」というサービスを行っています。旅行者と受け入れ側の新しい関係性を作るこの取り組

みが始まったきっかけとは。

井口 「さかとケ」の原点には私の幼い頃の経験があります。うちは実家が旅館なので、お盆や正月などの忙しい時期になると親戚が集まって、毎年家業の手伝いをしていました。1週間か10日間くらいとこたちと一緒に布団を敷いたり食器を洗ったりして、空いた時間には地元の人たちとサッカーや野球をする。そんな日々を過ごしていると、普段は遠くに住んでいるいとこたちも新潟にたくさん知り合いや友だちができるし、この地域が故郷のようになっていく。そういう関係性を作ることが、新し

KURUMED COFFEE



地域を動かすサードプレイス クルミドコーヒーとは

2008年に影山さんが西国分寺にある生家の跡地に開業した、こどもたちのためのカフェ。影山さんが著書で「お金だけではない価値を交換する場」と表現する通り、お店で働くスタッフや多くの常連客がともに地域の文化を育むローカルコミュニティのハブとして機能。ワークショップやイベントなど、参加型のコンテンツも多数展開する。2017年には2店舗目となる『胡桃堂喫茶店』を国分寺にオープン。

☎クルミドコーヒー ☎042-401-0321
<https://kurumed.jp/>

担当研究員より

参加者も役割を担い
自らが旅のつくり手になることが
「帰る旅」の流儀

2023年秋に初めて実施した「帰る旅スタディツアー」(新潟県津南町)のプロジェクトリーダー兼関係性クリエイターを務めたのは、60年続く宿を「自然や自分と向き合う空間、ひとりでも楽しめるリトリート温泉宿をつくりたい」と考えた『しなの荘』の女将、そして跡継ぎが途絶えた古民家を私費で購入し「秋山郷の魅力に気づいた人々が交流する拠点をつくりたい」という観光協会事務局長(プライベートの活動)の二人だった。参加者は、関東を中心に遠方は高知や奈良から19歳〜60代まで見事に多様な顔触れが集まった。「帰る旅」のつくり方の特徴のひとつが「関わる余白を残すこと」である。完璧な準備、おもてなしなどない。今回の関わりしは、未来に向けて議論を重ねるアイデアソンや、ほぼ肉体労働の古民家の掃除や塗装作業など。期待されて役割を担った参加者たちは、前のめりに協力し、あっという間に馴染み、たくさん語らい、同じ風呂に浸かり2日間を過ごした。家業や集落に脈々と流れる「文化」が、人と人が暮らしを重ねることで育まれ続け、営みや活動だとしたら、津南町の2つのプロジェクトは、今回の出会いが文化継承と進化に向けた刺激となったのではないだろうか。この輪をつないでいきたい。

「帰る旅」の運営母体である「帰る旅研究会」は、雪国観光圏からスタートしたが、メンバーに参加の強制力はなく、何度も通う旅・帰る旅を自らつくることに共感し、自らの意志で参加したメンバーたち全員が主体者となり構成されている。部活動のような自治組織となっている。未来に向けた次のステップとしては、雪国観光圏外も含めて、「帰る旅」を自ら実現したい新メンバーを全国に広げていきたい。地域単位でも事業者単位でも良いと考えている。「おかえり・ただいま」で始まる「帰る旅」を自らつくることに興味がある方は是非手を挙げてほしい。



じゃらんリサーチセンター
調査開発グループ 客員研究員

北嶋緒里恵
きたじま おりえ

帰る旅研究会の共同代表。先日秋山郷の集落で初めて会ったおじいさんから、近隣で拾ったという「恐竜の卵の化石(未確認)」を見せていただき嬉しかった、また会いに行きます。



「帰る旅」は一般的な旅行好きとは異なる層に響くと思います。これからの旅は、観光と文化をちゃんと同じ重さで考えていくことが必要だと思います。長い時間をかけて育まれた文化があるから、その地域に人が集まる。けれど、観光主導で考えすぎてしまうと、文化が消費されて薄くなってしまいかねない。だから、観光地こそ新しい文化を積み上げていく意識が必要だと思います。そのためには、そこに暮らす人々が「何が生み出せるか」ということに目を向けることが大事だし、「帰る旅」のように土地に関心のある人の手を借りるときも、

INFORMATION



帰る旅
公式サイト

「帰る旅」に関する情報は WEB・SNSでも提供中

帰る旅プロジェクトの公式サイトでは、「帰る旅」のコンセプトや内容、参加メンバーや関連リンクなどを掲載している。ぜひ、公式サイト (<https://jrc.jalan.net/kaerutabi/>) や帰る旅研究会X (@kaerutabi_prj) などで発信される情報をチェックしてほしい。



帰る旅研究会
X (旧Twitter)

小さな輪を広げながら 新しい旅の価値を作りたい (井口さん)

影山 もし「帰る旅」にターゲットがいるとすれば、それは僕かもしれないですね。先ほどもお話ししたように、僕は旅行好きではないので新しい場所にあちこち行きたいわけではないけれど、自分と関係性があるところには行きたい。そう考えると、

「帰る旅」は一般的な旅行好きとは異なる層に響くと思います。

これからの旅は、観光と文化をちゃんと同じ重さで考えていくことが必要だと思います。長い時間をかけて育まれた文化があるから、その地域に人が集まる。けれど、観光

単純作業だけでなく未来につながる取り組みを行うのがいいと思います。そうやって文化が育つことで、また人が集まってくる。そのプロセスを端折っちゃいけないし、それは僕ら自身が国分寺でやっていることそのものでもあります。

井口 これからの旅は、地域と旅行者が文化をともに作り上げ、お互いに学び合っていくことが大きなキーワードになるかもしれませんね。「帰る旅」はまだまだ始まったばかりですが、小さな輪を広げながら少しずつ新しい旅の価値を作っていくことが、地域にとっても非常に大事なのではないかと思います。

地域に暮らす人々同士が 何を生み出せるかに目を向けるべき (影山さん)

「旅」の可能性につながるんじゃないかと感じました。影山 実は「クルミドコーヒー」でも「さかとケ」に近いことをずっとやっています。たとえば僕らはクルミを食材として使うことがあるんですけど、クルミを拾ったり皮を剥いて

たりする作業をお客さんと一緒に行う。そのとき、お客さんに現金で時給を払うことはせずに、無償ボランティアもしくは国分寺の地域通貨でお支払いします。そうするとお客さんは地域通貨を使って僕らのカフェのコーヒーを飲んだりするので、結



2023年10月に新潟県津南町で開催された「『秋山郷』古民家のある日常 再興ワークショップツアー」には関東圏を中心に8名が参加。地域の人と参加者がともに汗を流し、秋山郷の未来を考えた



果的に売上は少なくなりません。ただ、お店のスタッフとお客さんが一緒に汗を流して仲間になることは、売上には代えられない価値があると思うんです。それに仲間が増えることは、入ってくるお金が減る代わりに、出ていくお金も減るということでもある。日本の経済成長が右肩上がりではなくなった今、多くの経営者は「売上を伸ばさずにお店や会社が成り立っていく仕組み」をどう作るかという問いに直面しています。僕らや「さかとケ」がやっていることは、その答えのひとつだと思います。

井口 旅館経営をしているとどうしても目先の売上単価や稼働率のことを考えてしまうけれど、もうそんな時代じゃない。お客さまとの関係性を作って、本当に困ったときにお互い助けたり、助けてもらったりできる場を作りたい。「帰る旅」に関わり始めてから、ずっとそう考えています。「さかとケ」などを通じて私たちの日常を体験してもらえれば、きっと地域のファンが増えて、地域が元気になる。そうすれば、この土地に根付いた雪国の文化を後世に残

人が文化を育て、地域の魅力ができる そのプロセスを端折っちゃいけない (影山さん)

井口 逆に広域で取り組まないと新しいことがなかなかできないんです。3県7市町村という大きく聞かれますが、圏内の人口はおそらく8万人ほど。高齢者の比率も高いので、若い人は驚くほど少ないのが現状です。だからこそネットワークを作って頑張っています。「帰る旅」に関しても、やっぱり人が大事なんですよね。みんなが自分ごととしてプロジェクトに取り組んで、そこに生きがいを見出すことができれば、いつか地域が変わっていく。そんな思いで続けています。

